

人は自然に守られている



中村 哲

15

チームワークに難儀するのは、
はじめて同じである。

あるとき、日本人ワーカーの一人が水路作業現場でけがをした。金づちで左指をしたたかに打ち、挫滅創でひどい痛みを思った。昼食時にみんなが心配して、あれやこれや治療法を述べた。「患部を洗って水で冷やせ」と私が示唆したのに、現地の者がそれぞれに異なる意見を言う。議論百出。「アルコールをかけよ」「温めるべきだ」、くらいならまだいいが、「煮えたきつたやかに指をつける」に至っては、さすがに医師でも
ある私は黙っておれない。



私が医師であることを、現地人もワーカーも忘れていて
のである。血流をよくするた
め手を高くし、小骨折や腱の
断裂が疑われれば、ギプスで
固定するのが常道だ。このと
きはかりは「わしは医者だ
ぞ」と強調せざるを得なかつ
た。

ところが、このワーカーも

しかし、さもあんな。工
事現場では汚い作業服を着
て、ガツガツと食事をしてい

思い上がる人間

一徹者。「作業中はせめて
三角巾で腕をつれ」と指示す
れば、答えていわく「作業し
にくいし、たかがこれくらい
でおおげさに思われる」。「男
の見えをとるか、治療をとる
か」と問えば、「見えをとる
ます」ときつぱりと述べた。
立派である。

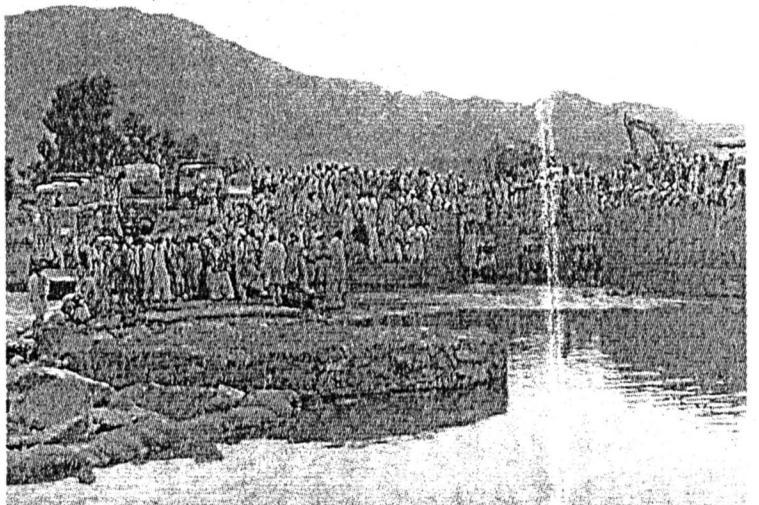
日本の病院では対照的で、
放置すれば治るようなけがで
も、心配して来院するのが普
通になってしまい、診察中、
「これくらいで病院にくる
な」と内心思うことが一度な
らずある。そんなせりふをは
けば、患者も傷つくし、病院
の評判も悪くなるので黙って
いる。

さて、考えればアブガニス
タンの至る所が「無医地区」
である。小さなけがや軽い病
気なら医者に行かない(行く力
ネがない)。民間療法や祈祷

師、自己流の治療法で対処す
る。腸チフスや悪性マラリア
などの重症例は別として、軽
い病気なら、安静にさえすれ
ば、何をやっても治るのであ
る。もちろん、長い間に「こ
うすれば治りやすい、ああす
ればかえって悪くなる」とい
う経験が蓄積して、医学治療
が進歩し、民間治療がいまわ
たる。

しかし、えてして人間は自
分の行為で治ったと信じがち
である。これは世界中、変わ
らない。告白すれば、実は医
者の世界でもそうで、はたし
て薬が効いたのか、放置して
も治ったのか分らないこと
が案外少なくない。技術的に
は、基本をきちんと守り、多
少のさじ加減をその人に応じ
て加えれば治るものは治り、
治らないものは治らない。た
だ、正しい診断さえあれば見
だ。一匹狼の集合だと考え

通しが予測でき、患者の不安
を鎮めることができるのみで
ある。臨床経験が豊富な医師
をたっぷりと講義してくれ
た。「釈迦に説法、それくら
いは知っている」と言いたか
ったが、診療意欲をそがぬよ
う黙って聞いた。これにはか
りの忍耐が要る。



取水口に集結した作業員や重機の運転手、水路関係のPM S職員たち=3月7日

いわば遊牧民的な気風で、マ
ニユアル式の組織的な集団は
現地向きではない。

話がそれだが、私がいつも
思うのは、人は本当は備えら
れた自然に守られている事実
に気が付かず、自分の意図でこ
とが成ると錯覚しがちであ
る。その極致が「バベルの塔」
の物語として旧約聖書に描か
れている。神を忘れて思い上
がった人間が天に届かんと巨
大な塔を築き上げようとした
とき、神はこれを破壊して滅
ぼされた。今、作業現場の上
空を舞う米軍ヘリを見、「民
主主義」「近代化」ですべて幸
せがくるかのごとき、喧騒と
錯覚を眺めるにつけ、なぜか
この物語を思い出す。

グローバリゼーションとい
う名の、世界を支配する人為
と欲望の巨大な組織化に比べ
れば、現地の人間の「過剰な
自信」と「チームワークのな
さ」が、何やらかわいらしく
思えて仕方なかった。
(医師・ペンヤワール会現
地代表)

「ペンヤワールから沖繩
へ」は毎週第四日曜日の掲載
ですが、今月は第五日曜日と
しました。

米軍ヘリの喧騒と錯覚の中で思う